

シリーズ・世界の図書館 (3)

梨花女子大学図書館 (ソウル)

後藤 総一郎*

この3月末、3年間お世話になった図書館のみなさんと別れて、4月初旬、私はソウルの梨花女子大学を訪れた。

豊かな樹木に囲まれた広大なキャンパスは、色鮮やかな連翹と木蓮とつつじの花が一斉に咲き始め、まるで清楚な花園の饗宴を思わせるような美しい風景であった。

在外研究を兼ねて、前から請われていた、この大学の社会科学部政治学科の大学院で、「戦後日本思想史」(10回)を講義するために、4月初旬から7月初旬まで、キャンパスの頂上にオープンしたばかりの快適なインターナショナルハウスに滞在した。



梨花女子大学図書館

*ごとう・そういちろう／政治経済学部教授／日本政治思想史

その間、毎週1回（3時間）の講義のほかに、院生の一泊合宿で「日本の大学の歴史と現況」について小さな講演をし、学部学生のための特別講演で「日韓文化交流の歴史と未来」について、さらに現代日本学会で「丸山真男と柳田国男－21世紀を拓く学問的可能性に向けて－」というテーマでそれぞれささやかな講演をしたのであった。

名通訳をしてくれたのは、韓国からの留学生で、現在わたしの研究室に在籍（博士後期課程）し、日本の植民地下におけるいわゆる「皇民化」をめぐる思想史的研究に打ち込んでいる朴竣相君である。

ところでこの大学のそもそもの草分けは、今から百年余前にさかのぼる1886年（明治19年）のことである。

アメリカのMang F. Scranton 女史（当時53歳）が、医者である一人息子をつれて、生涯この地に骨を埋める覚悟でわたってきて、チョンドンに病院を開き、寮を建て、孤児を教育するところからはじめられたという。

昨年上梓された『梨花女子大学百年史』および『梨花寮110年の物語』のなかに、その頃のディティールが語られている。

ときの王である高宗によって命名されたという「梨花」（Pear Blossom）は、そのまま今日の大学の名称として受け継がれている。

梨花学堂として出発したこの大学の前史は、1922年、大学令、専門学校令によって専門学校（今日の延世、高麗大学も同様）となり、第二次大戦後の1945年、日本から解放され独立したあと大学として昇格し、付属の幼稚園から大学院まで九つの学校を擁し、14の学部と66の学科と29の研究所からなるいわゆる総合大学として今日を迎え、韓国におけるミッションスクールの草分けであることは言うまでもなく、多くの女性の人材を世に送りつづけているまさに名門校にふさわしい大学として存在しつづけている。

その大学の教員650人・職員300人と2万2千人の学生の教育研究のセンターとして日々活用され盛況を示しているのが、1986年に新装になった5階建（地下1階）オール開架の図書館である。

1923年に正式な教育施設として設立された図書館は、70余年にわたる蔵書の形成を通して、今日その数は120万冊を超え、（日本の著書は辞典類が多く、一般書は少ない）8千5百種類の雑誌と、33万本のマイクロフィ

ルムを収蔵している。今年の2月からは蔵書のデジタル化をはじめ、当然のこととして200台のコンピュータもつねに満席となって利用されている。

そのほか貴重図書（3階）として、古書、古い雑誌新聞類、北朝鮮関係資料が収蔵されており、女性解放の拠点ともいえるこの大学の象徴的役割を担って、隣りにある女性研究所（2階建6部屋）の蔵書約1万7千冊もこの図書館の5階の60書架に並べられている。

この6月11日、12日の2日間、東アジア女性学会議が開かれており、日本、中国、韓国の女性史研究者が集まり、研究報告と討論が行われていた。そのコーディネーター役をつとめていたのも、この女性研究所であった。

日本の図書館情報大学大学院に学んだ河仁淑さん（情報奉仕課主任）に案内してもらいながら、この大学の図書館の組織や予算や選書や閲覧状況などについて二度三度おたずねした。

図書館長は総長の任命による教授が就任し、職員は

司書30名（一級司書5名＝大学院修了、二級司書21名＝大学卒、準司書4名＝短大卒）と一般事務職員および技術職員（コンピュータ、マイクロ担当）2名の計35名と臨時職員23名（3ヵ月更新）と返本要員としての学生アルバイト189名によって構成されているという。

そのほか、大学院博士課程修了者の研究員がおかれている。

開館時間は、月曜日から金曜日までは、朝9時から夜9時までと、土曜日は午後3時までで、日曜日は休館日となっている。



河仁淑さんと筆者（女性研究所前にて 1999年6月）

ところでこの図書館の個性は、夏休み（7月8月は11時まで）を除いて、1階の一般閲覧室（300席）は、24時間オープンであるということである。ただし、夜の11時から朝の5時までは出入禁止となっている。

ときどき朝の散歩の折り、卒論や就職試験や国家試験のために徹夜で勉強して本を抱えて寮に帰ってくる女子学生を見かけて、なるほどと感心したりしたのである。

本学の新図書館も、都心型大学を誇りとするならば、見習って欲しいものだと、眼前に聳え立つ南山タワーに遠くリバティタワーを重ねながら思ったりしたものである。

年間図書費2億円は本学と比べてやや少ないかなと思われるが、韓国の出版状況の悪いのを考えれば当然のことかもしれない。そのうち約65パーセントが雑誌購入費すなわち本学でいう逐次刊行物予算であるという。

こうした図書館の構成のなかで、何よりもわたしの眼と心を喜ばせてくれたのが、一日平均ののべ利用者数1万人と図書の貸出し数5千冊という驚くべき数字であった。

これは西欧の大学図書館におしなべて見られる風景であるとはいえ、試験期を除くと閑古鳥が鳴いているときさえあるといわれる和泉図書館の閲覧室のことを思う時、見事という以外に言葉を失ったほどであった。

そしてこのよく勉強する学生達の座席がまたよく用意されているということもできよう。学部それぞれ用意されているいわゆる自習室1000席も含めてであるが、図書館の閲覧席は一般閲覧席300のほかに各階に用意されており、のべ4005席を数えるという。このなかには大学院に学ぶ院生達の個席300も用意されており、日々静々と勉強している姿を河さんに案内してもらいながら眺めてきたのであった。

広大なキャンパスの急坂を登りつめたところに建つ白亜の大図書館と、そこを根城として日々学ぶ2万の女子学生の知の群れと蓄積がこの大学を名門たらしめている美しい泉となっているのだ、ということをしみじみと思わされた図書館通いとその印象であった。

（1999年7月4日、ソウルの梨花女子大学・インターナショナルハウスにて）